

## 看護系大学における「基礎ゼミナールⅠ」の ルーブリック評価の作成過程と課題

山 口 直 己	大 島 弓 子	古 賀 節 子
五十嵐 慎 治	笹 木 りゆこ	蒔 田 寛 子
大 野 裕 美	永 井 邦 芳	松 本 尚 子
中 島 怜 子	山 根 友 絵	野 村 浩
西 澤 和 義		

### 抄録

本稿では、「基礎ゼミナールⅠ」のルーブリックの作成過程とそこから浮かび上がった課題についてまとめた。ルーブリックの作成では3つの視点で検討した。評価基準の表記は、学生に提示した時の読み取りやすさを配慮し、表頭の評価基準を“目標からかけ離れている”、

“目標からやや遠い”、“目標に近づいている”、“目標をほぼ達成”、“目標を達成”とした。評価指標の配点設定は、科目の到達目標とディプロマ・ポリシーとの対応を意識した。評価基準とする記述語の内容は、評価の実現可能性や文言のわかりやすさなどを考慮し、到達基準ごとの違いがわかるようにした。その後、試行的評価を行い、評価材料と評価指標が一致しないことが明らかになった。従って、評価指標と評価材料の整合性の担保や、評価材料が複数に及ぶ場合の配点方法を検討する必要がある。

キーワード：ルーブリック 教育評価 基礎ゼミナール

### I. はじめに

中央教育審議会は2012年8月に、「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」を公表した。その中でアセスメント・ポリシーに則った成果の評価には、学修行動調査やルーブリック等、どのような具体的な測定手法を用いたかを明確にする必要があると述べられている(中央教育審議会, 2012)。学修の評価は、教授者の評価内容を明確にして、教授者と学修者がそれを理解し合うことが必要である。なぜならば、学生は、評価内容が明確にされることによって、科目で求められている基準が何であるかが把握でき、学修に対する意欲の向上と、主体的な学修姿勢を身につけることに繋がるからである。また、教授者にとっても、一貫性のある評価が実施できるからである。そして、このことを明確にできる基準の一つにルーブリックを用いた評価がある。ルーブリックは、レポートの評価、学生の活動や作品・演出・実験の観察評価、面接の評価、プレゼンテーションやグループ活動の自己評価・相互評価、複数の教員で

担当する初年次教育，オムニバス授業の評価に適しているとされている(沖，2004)。

本学科では，2014年に2015年度のカリキュラム改正を行い，それと同時に3つのポリシーであるアドミッション・ポリシー，カリキュラム・ポリシー，ディプロマ・ポリシーの再検討を行った。2016年度には，看護学科のカリキュラム評価として，学生・教員を対象としたアンケート調査を実施し，その結果を報告した(蒔田・大島・山口他，2016)。このようにカリキュラムの評価は行ってはいたものの，アセスメント・ポリシーとして明確に示していなかった。今回，アセスメント・ポリシー策定の一環として，評価の方法を検討する中で，ルーブリックに焦点をあてて検討し，「基礎ゼミナールI」と「看護学研究I」の2科目についてのルーブリック作成に取り組んだ。本稿では，「基礎ゼミナールI」のルーブリックの作成過程とそれに伴って浮かび上がった課題について述べることとした。

今回の取り組みは，本学科において他科目のルーブリックを作成する際の足掛りとなる意義深いものと考えため，報告する。

## II. 目的

「基礎ゼミナールI」のルーブリックの作成過程と課題についてまとめることを目的とした。

## III. ルーブリック作成過程とその成果物

### 1. ルーブリックの概要

我が国の大学教育では，2011年4月に大学設置基準が改正され，卒業の認定のみならず通常の授業における成績評価基準等を明示する必要性が述べられた。さらに，翌年2012年3月に学校教育法施行規則も改訂され，通常の学修成果に係わる評価基準の明示化と公表が義務づけられた。このことから，学習者の達成度を示す基準となるルーブリック評価が求められることになった(石垣，2016)。

ルーブリックは米国で開発され，「成功の度合いを示す数値的な尺度」と「それぞれの尺度にみられる認識や行為の特徴を示した記述語」からなる評価指標である(石井，2010)。テスト法では判定することのできない，思考力・判断力などの質的な評価を行うための評価指針として必要であり，レポートや論文など，学生の示したパフォーマンスを評価する場合にルーブリックを用いることが有効である(沖，2016)。ルーブリックにより達成水準が明確になることで，教員にとっては，成績評価の一貫性と公平性を確保できるとともに，学生の学修状況や修得状況が正確に把握できることから，授業改善に役立つ方法であるといわれている。学生にとっても，評価基準が明確になることで，学修の自律性を促すことに繋がるなどの利点がある。また，カリキュラムにおいても，プログラムの改善などに有効であるとされている(沖，2014)。

しかし一方で，評価が厳密になることで，留年する学生が増える可能性があること，評価基準以

上の能力を持つ学生の能力を向上することが制限されることなどが懸念されている。また、ルーブリックの信頼性・妥当性を向上させるためには、3人以上の教員の合意によって、「記述語」や「尺度」を練り上げていくことが望ましいことから(山口, 2013), 教員にとっては時間や労力が必要になることも考えられた。

## 2. ルーブリック作成にあたり「基礎ゼミナールⅠ」を取り上げた理由

アセスメント・ポリシー策定プロジェクトメンバーで、ルーブリックについての学修を進める中で、ルーブリックにはいくつかの課題はあるものの、客観的な指標を用いて厳密な評価を行うことは、評価の一貫性や公平性を保つことができること、学生の自律性を促すことに繋がることを考え、ルーブリック作成に取り組むことになった。

ルーブリックには、個別の授業・課題に対するもの、教科・分野に関するもの、教科を超えて長期的に育成する資質・能力に関するもの、さらに、大学の教育評価認定機関である米国のWASC (Western Association of School and Colleges) のように、機関を超えて活用可能なものなど、いくつかの種類があるが(文科省, 2015), まず、科目レベルでのルーブリックの作成に取り組んだ。今回は、本学科で複数教員がそれぞれに少人数の学生を受け持ち、学生のパフォーマンスを評価する科目のうち、「基礎ゼミナールⅠ」、「看護学研究Ⅰ」の2科目について作成した。「看護学研究Ⅰ」の作成過程については別の論文で述べているため、本稿では、「基礎ゼミナールⅠ」に焦点をあてて報告する。

## 3. 「基礎ゼミナールⅠ」の概要

「基礎ゼミナール」は、高等学校から大学での学修への円滑な移行を図り、大学で自ら学修する力を身につけるために必要なスタディスキルを修得することを目的とする科目である。1年次の通年科目として位置づけられ、「基礎ゼミナールⅠ・Ⅱ」がある。中でも、「基礎ゼミナールⅠ」は1年次春学期に開講され、大学生になるために必要な、「学ぶ姿勢」「聴く力」「話す力」「読む力」「書く力」「調べる力」を身につけることを目的としている。2017年度は、1年生96名を6名の教員が担当し(教員1人に学生15～16名)、少人数形式でおこなった。

授業の到達目標は、下記の5項目である。

- (1) 相手を尊重して意見を聞き、自分の意見を述べることができる
- (2) テーマに沿って情報収集できる
- (3) 文章の内容を正しく読み取ることができる
- (4) 定められた形式でレポートを書くことができる
- (5) 自主的に学修する力を獲得する

## 4. 「基礎ゼミナールⅠ」のルーブリック作成過程

### 1) 文献検討

「基礎ゼミナールⅠ」のルーブリックの作成にあたり、まずは文献検討および情報収集から開始し

た。CiNii Articlesで「ルーブリック」「基礎ゼミナール」をKeywordに検索をかけると1件、「ルーブリック」「看護」をKeywordに検索をかけると43件であった。概観すると、看護学実習の評価でルーブリック評価を導入したものが多く、作成したルーブリックの効果を報告したものが多かった。そこで、検索エンジンのGoogleを用いて「ルーブリック」「基礎ゼミナール」で検索をかけ、作成例が参考にできそうな資料を収集した。その中で、弘前大学基礎ゼミのルーブリックの例(田中, 2014)を参考にした。メールにて著者より使用許諾を得て、資料を一部引用・改変して作成する事を試みた。また、ルーブリック作成にあたり、沖(2016)のルーブリックの基本的な構造を参考に、課題に対する具体的な到達目標を「評価指標」、どの程度達成できたかを示す尺度を「評価基準」、それぞれの評価基準にみられる認識や行為の特徴を「特徴の記述」として枠組みを設定した(表1)。

表1.ルーブリックの枠組み

	評価基準1	評価基準2	評価基準3	評価基準4	評価基準5
評価指標1 (シラバス上の到達目標1)	特徴の記述1-1 (配点)	特徴の記述1-2 (配点)	特徴の記述1-3 (配点)	特徴の記述1-4 (配点)	特徴の記述1-5 (配点)
評価指標2 (シラバス上の到達目標2)	特徴の記述2-1 (配点)	特徴の記述2-2 (配点)	特徴の記述2-3 (配点)	特徴の記述2-4 (配点)	特徴の記述2-5 (配点)
評価指標3 (シラバス上の到達目標3)	特徴の記述3-1 (配点)	特徴の記述3-2 (配点)	特徴の記述3-3 (配点)	特徴の記述3-4 (配点)	特徴の記述3-5 (配点)
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮

## 2) 評価指標と評価基準

シラバスで提示している「基礎ゼミナールI」の5つの到達目標を評価指標として示し、各到達目標に対する評価基準を、沖(2016)の文献中にあるアメリカで標準的に用いられているルーブリック・テンプレートの5段階の評価基準になるよう検討して原案を作成した。また、例えば、到達目標①相手を尊重して意見を聞き、自分の意見を述べることができるに対して、段階1をPoorとし「他者の意見を聞くことなく、自らの考えを述べることができない。」、段階2をBeginningとし「他者の意見を聞くことはできるものの、自らの考えを述べることができない。」、段階3をDevelopingとし「他者の意見を聞くことができ、自らの考えを述べることができるが、分かりにくい点が多い。」、段階4をAccomplishedとし「他者の意見を聞くことができ、自らの考えを分かりやすく説明できるが、批判に対して反論できない。」、段階5をExemplaryとし「他者の意見を聞くことができ、自らの考えを正確に、かつ分かりやすく説明でき、さらに批判に対して反論もできる。」と示した。

## 3) 原案作成後の検討内容

原案を作成し(表2)、「基礎ゼミナールI」担当教員6名と会議を行い、さらにアセスメント・ポリシー策定プロジェクトメンバー14名とも検討を重ねた。その中で、評価基準をどのように表記するのか、評価指標の配点ウエイト(重み付け)をどのように設定するのか、評価基準とする特徴の記述にはどの程度の幅を設けるのか、の主に3つの視点で検討を重ねた。

評価基準の表記については、ルーブリックは事前に学生に公開することが前提となるため、原案のようなPoor, Beginning, Developing, Accomplished, Exemplaryの表記では、学生に評価基準が伝わりにくいと考えられた。そこで、学生に提示した時の読み取りやすさも配慮し、表頭の評価基準を“目標からかけ離れている”, “目標からやや遠い”, “目標に近づいている”, “目標をほぼ達成”, “目標を達成”という表記に変更した。

#### 4) 配点の検討

評価指標の配点については、どのように割り振るかを検討する中で、改めてシラバスに提示した到達目標とディプロマ・ポリシーの対応を意識した。2015年度のカリキュラム改正では、カリキュラムマップを作成し、各科目とディプロマ・ポリシーとの関係とその強さについて示した。看護学科のディプロマ・ポリシーは、「対象理解」、「倫理性」、「看護実践力」、「社会貢献」、「研究力」、「イノベーション」、「協調性」の7つであり、すべての科目はディプロマ・ポリシーの各項目について、◎、○、△で重み付けを表現しており、◎ほど重み付けが強いとしている。「基礎ゼミナールⅠ」はそのうち、対象理解:△、倫理性:○、看護実践力:△、研究力:△、協調性:○と対応して科目構成されている。そのため、○がついている「倫理性」や「協調性」を評価する項目については、1)相手を尊重して意見を聞き、自分の意見を述べることができる、の配点を高く設定した。また、スタディスキルに関連する項目については、4)定められた形式でレポートを書くことができる、5)自主的に学修する力を獲得する、の配点を高く設定した。評価指標の配点を検討後、評価基準ごとの配点を均等になるように設定した。さらに、特徴の記述内でも判断に迷う場合があることが想定されたため、例えば、評価指標「1)相手を尊重して意見を聞き、自分の意見を述べることができる」は0～5点と特徴の記述内の配点に幅を設けた。

評価基準ごとの特徴の記述については、最も到達度の高い「目標を達成」の基準を設定した後、評価の実現可能性や文言のわかりやすさなどを考慮し、到達基準ごとの違いがわかるように評価基準を設定した。

このような検討を計6回行い、トライアルの「基礎ゼミナールⅠ」のルーブリックが完成した。最終案を表3で示す。

表2. 基礎ゼミナールI ルールブック (原案) ——修正前——

振業の到達目標	0 Poor	1 Beginning	2 Developing	3 Accomplished	4 Exemplary
1) 相手を尊重して意見を聞き、自分の意見を述べることができる。	他者の意見を聞くことなく、自らの考えを述べることができない。	他者の意見を聞くことばできるものの、自らの考えを述べることができない。	他者の意見を聞くことができ、自らの考えを述べることができ、説明できるが、批判に対して反論できない。	他者の意見を聞くことができ、自らの考えを分かりやすく説明できるが、批判に対して反論できない。	他者の意見を聞くことができ、自らの考えを正確に、かつ分かりやすく説明でき、さらに批判に対して反論もできる。
2) テーマに沿って情報収集ができる。	必要な情報を適切な方法で収集できない。	必要な情報を適切な方法で収集できるが、信用出来ない内容も含まれている。	必要かつ信用できる情報を適切な方法で収集し、活用しやすいため、内容に整理できない。	必要かつ信用できる情報を適切な方法で収集し、自分が活用しやすいため、内容に整理できる。	必要かつ信用できる情報を適切な方法で収集し、多くの人が活用しやすいため、内容に整理できる。
3) 文章の内容を正しく読み取ることができる。	正しい内容(キーワード)を全く抽出できず、文章の要約ができない。	正しい内容(キーワード)を一部抽出できるが、文章の要約ができない。	正しい内容(キーワード)を抽出できるが、文章の要約ができない。	正しい内容(キーワード)を抽出でき、文章の要約時に自分の意見が混じる。	正しい内容(キーワード)を抽出でき、文章の要約にも自分の意見が混じらない。
4) 定められた形式でレポートを書くことができる。	レポートの体裁が全く定められた形式に沿っていない。	レポートの体裁が一部定められた形式に沿っていない。	レポートの体裁が定められた形式に沿っているが、誤字脱字が二つ以上、もしくは段落が区切られていない箇所が二つ以上ある。	レポートの体裁が定められた形式に沿っており、誤字脱字が一つ以上、もしくは段落が区切られていない箇所が一つ以上ある。	レポートの体裁が定められた形式に沿っており、誤字脱字なく、段落も明確で、読みやすい文章である。
5) 自主的に学修する力を獲得する。	自主的に学ぶことが全くできない。	授業内容に対して興味・関心を持つものの、あまり自主的に学ぶことができない。	授業内容に対して興味・関心をもち、時々自主的に学ぶことができる。	授業内容に対して興味・関心をもち、常に自主的に学ぶことができる。	授業内容や、関連する新たな知識や技能に対して興味・関心をもち、常に自主的に学ぶことができる。

表3. 基礎ゼミナールIルーブリック (最終案) —修正後—

	目標から かけ離れている	目標から やや遠い	目標に 近づいている	目標を ほぼ達成	目標を 達成
振業の 到達目標					
1) 相手を尊重して意見を聞き、自分の意見を述べることができる。	他者の意見を聞くことなく、自らの考えを述べるだけでいい。 (0~5点)	他者の意見を聞くことのできるものの、自らの考えを述べることで、自分の意見を述べることができない。他者の意見が聞けない。 (6~11点)	他者の意見を聞くことができ、自らの考えを述べることもでき、自分が、分かりにくい点がある。 (12~18点)	他者の意見を聞くことができ、自らの考えを分かりやすく説明でき、批判に対して反論が十分でない。 (19~24点)	他者の意見を聞くことができ、自らの考えを正確に、かつ分かりやすく説明でき、さらに批判に対して反論もできる。 (25点)
2) テーマに沿って情報収集ができる。	必要な情報を収集できない。 (0~2点)	必要な情報を収集できるが、出典が不明な内容も含まれている。 (3~5点)	必要かつ出典が明確な情報を適切な方法で収集でき、活用しやすい内容に整理できている。 (6~10点)	必要かつ出典が明確な情報を適切な方法で収集し、自分なりの方法で整理できる。 (11~14点)	必要かつ出典が明確な情報を適切な方法で収集し、多くの人が活用しやすい内容に整理できている。 (15点)
3) 文献の内容を正しく読み取ることができる。	正しい内容(キーワード)を全く抽出できず、文献の要約ができない。 (0~1点)	正しい内容(キーワード)を一部抽出できるが、文献の要約ができない。 (2~3点)	正しい内容(キーワード)を抽出できるが、文献の要約ができない。 (4~6点)	正しい内容(キーワード)を抽出でき、文献の要約ができるが自分の意見が混じる。 (7~9点)	正しい内容(キーワード)を抽出でき、文献の要約も自分の意見が混じらない。 (10点)
4) 定められた形式でレポートを書くことができる。	レポートの体裁が全く定められた形式に沿っていない。 (0~5点)	レポートの体裁が定められた形式に沿っている。 (6~11点)	レポートの体裁が定められた形式に沿っており、自分の考えが述べられている。 (12~18点)	レポートの体裁が定められた形式に沿っており、自分の考えに論拠を示して述べられている。 (19~24点)	レポートの体裁が定められた形式に沿っており、自分の考えに論拠を示して述べられており、説得力のある説明ができていいる。 (25点)
5) 自主的に学修する力を獲得する。	自主的に学ぶことが全くできない。 (0~5点)	ゼミのテーマに対して興味・関心を持つものの、あまり自主的に学ぶことができない。 (6~11点)	ゼミのテーマに対して興味・関心を持ち、時々自主的に学ぶことができる。 (12~18点)	ゼミのテーマに対して興味・関心を持ち、常に自主的に学ぶことができる。 (19~24点)	ゼミのテーマや、関連する新たな知識や技能に対して興味・関心を持ち、常に自主的に学ぶことができる。 (25点)

#### IV. 作成に伴って明らかになった課題と予測されるメリット

「基礎ゼミナールⅠ」は複数の教員が担当する科目であるため、シラバスで提示した到達目標の吟味が十分になされていなかった可能性がある。到達目標を設定する際に、どのような評価材料を用いるのか、どの到達目標が修得を目指すディプロマ・ポリシーとリンクしているか、といった点である。結果的に今回はシラバスで提示した到達目標に整合性を持たせる形で、ルーブリックの評価指標の検討を行ったが、評価材料と評価指標が一致しない、あるいは一つの評価材料が複数の評価指標と対応して複雑となり、試行的評価の際に混乱を招くといった事態を引き起こした。

具体的には、評価指標2)テーマに沿って情報収集できる(配点15点)を評価するにあたり、新聞要約や文献整理の課題、グループ発表点といった評価材料を用いたが、評価材料が複数に及ぶため、3つの判断材料の配点をどうするのかを再検討することとなった。また、先述の判断材料のうち新聞要約や文献整理の課題は、2)文献の内容を正しく読み取ることができる(配点10点)にも対応しているため、結局再検討を要することとなった。

以上の事から、ルーブリック作成にあたっては、評価指標と評価材料の整合性をいかに担保するか、評価材料が複数に及ぶ場合はどのように配点を付すか、といった点についての課題が見えてきた。ただし、一つの事柄を一元的に評価する事は偏向が生じる可能性もあり、やはり多面的に捉えることの重要性を考慮すると、今回直面した課題は、ルーブリックによる評価の限界とも考えられた。この課題についての今後の取り組みとしては、評価指標に到達するために、どのような評価材料で判断することが妥当かについてと、1つの評価材料が複数の評価指標と対応する場合の配点等について検討することである。さらに、科目に適したルーブリックにするためには、妥当性についての検討もすることが必要である。

全米カレッジ・大学協会では、各大学において共通に使用されることを目的としたVALUEルーブリックを作成している(山田・森・毛利他, 2015)。松下(2014)は、VALUEルーブリックを用いて作成・運用する際に、モディフィケーション(修正)とキャリブレーション(調整)が必要と述べている。中でも、キャリブレーションは、ルーブリックを活用する評価者が集まり、内容の妥当性について検討することである。学生の事例を用いて、各評価指標について各評価者が採点し、採点の根拠について説明する方法である。この方法は、今回作成した「基礎ゼミナールⅠ」のルーブリックの妥当性を高めるための1つの方法として活用できるのではないかと考える。

ルーブリックにより評価内容・基準が可視化されることで、評価の一貫性や公平性が確保できることを考えると、「基礎ゼミナールⅠ」のように複数の教員が担当する科目の評価にルーブリックを活用するメリットは大きいと考えられる。また、科目の到達状況を客観的に評価することは、教育の質を担保することにも繋がる。沖(2016)は、自らの科目の採点に適したルーブリックの作成には最低3年の微調整が必要と述べている。よって、今回明らかになった課題を踏まえ、トライアル用のルーブリックを見直し、検討を重ねることにより信頼性・妥当性の高いルーブリックの作成を目指したいと考えている。



## V. おわりに

今回は、学生15～16人に対して教員1人が担当する少人数形式で、複数の教員が担当する科目についてのルーブリックを作成した。今後、臨地実習などの科目にもルーブリック評価を取り入れていくことを検討したい。

「基礎ゼミナールI」のルーブリックによる評価の作成過程の一部については、第27回日本看護学教育学会学術集会の交流セッションで発表した。

### <引用文献>

中央教育審議会，新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～，2012，17.

石垣明子，大学におけるルーブリック評価の開発——医療人文科目における社会人基礎力を涵養するルーブリック——，つくば国際大学研究紀要，No.22，2016，27-39.

石井英真，IV. 教育目標と教育評価の関係，田中耕治（編），よくわかる教育評価 第2版，ミネルヴァ書房，2010，48.

蒔田寛子，大島弓子，山口直己他，2015年度カリキュラム評価の現状と課題——学生・教員からの評価に焦点をあてて——，豊橋創造大学紀要，第21号，2017，119-141.

松下佳代，学習成果としての能力とその評価 ——ルーブリックを用いた評価の可能性と課題——，名古屋高等教育研究，第14号，2014，235-255.

文部科学省，学修評価に関する資料，

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/\\_\\_\\_.../1393834\\_5.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/___.../1393834_5.pdf)（アクセス：2017.10.30）

沖 裕貴，大学におけるルーブリック評価導入の実際——公平で客観的かつ厳格に成績評価を目指して——，立命館高等教育研究，14号，2004，71-90.

沖 裕貴，ルーブリックとは，

[https://www2.chubu.ac.jp/quest/about/documents/rubric\\_what\\_full.pdf](https://www2.chubu.ac.jp/quest/about/documents/rubric_what_full.pdf)（アクセス：2017.10.30）

田中正弘，「アクティブラーニング科目の実施～弘前大学における試み～」平成26年度高等学校教務主任研究協議会（青森県教育委員会での招待講演：平成26年10月22日）

[http://culture.cc.hirosaki-u.ac.jp/21seiki/Tanaka/Masahiro\\_Tanaka\\_2014\\_10\\_22.pdf](http://culture.cc.hirosaki-u.ac.jp/21seiki/Tanaka/Masahiro_Tanaka_2014_10_22.pdf)（アクセス：2017.10.30）

山田嘉徳，森朋子，毛利美穂他，学びに活用するルーブリックの評価に関する方法論の検討，関西大学高等教育研究（6），2015，21-30.

山口陽治，教育評価におけるルーブリック作成のためのいくつかのヒントの提案——パフォーマンス評価とポートフォリオ評価に着目して——，群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編，第62巻，2013，157-168.